(『国語学』第53巻1号　2002・1・1)

# 国語学と縦書き

木田章義

国語(学)国文学科の出身者にとっては「国語学」という名称には違和感はないが，言語学や他言語専攻の研究者，日本語教育関係者が，自分の研究を「国語学」と呼びたくないと感じることは理解できる。もともと，国語学は国文学と共にできてきたものである。国文学者も国語学的研究方法は身につけており，国語学者も国文学的素養を基盤にもっているのが普通である。国語学は国文学的知識を背景に，国文学と綯い交ぜになって研究して行くことが多く，かなりはっきりとした方法や視点がある。国語学会はこの国語学を中心として，言語学，方言学の研究者が集まって結成されたが，結成当時には，専門の間の垣根はきわめて低かった。日本語に関する優れた研究であるならば，掲載を拒否されることはなく，門戸は広く開いていた。国語学会が無かった昭和初期，『方言』という雑誌があったが，この雑誌には当時の，国語学，言語学，方言学の先端的研究が満載であった。しかし，いささか偏りのある『方言』という名称は変えなかった。

名称や形式を変えるのには，はっきりとした理由がなければならない。日本語学者が多くなったという理由もあり得るだろう。『国語学』が横書きになったのも，恐らくそういう理由からであろう。同じ理由で名称を変えるのならすっきりする。しかし山東功氏が本誌205号に述べられている，「国語学」を使うことが，「日本語研究が背おった負の歴史に対する隠蔽」となり得るというような理由で，名称を変えるのは賛成できない。国語が駄目というなら，国文も同じであるし，明治や大正などの元号を入れた社名も国家意識の表れであった。正露丸はもと征露丸であり，一宇という名前も八紘一宇から，南さんの息子が「進」と命名されたのも南進政策の結果である。これらを「負」と言ってみても意味はない。言葉はいつも過去の積み重ねでできあがっている。その中には新しいものもあれば，古いものもある。その古いものがいつも昔の価値観を背負っているものではない。「アメリカの国語政策」「アメリカの国語は英語である」というような表現は昔から普通であった。インドやフィリピンにおける英語は公用語であるが，「英語はアメリカの公用語」とはまだ言えない。「国語」は普通名詞として機能しており，政治的なものでもなければ，特定の思想を表しているのでもない。沖縄では標準語を強制した時期があるが，「標準語」という言葉が負の歴史を背負っているとは言うまい。一つの時代を否定するとしても，その時代に生まれた言葉すべてを否定することはできない。清水康行氏も本誌200集で述べられているように，朝鮮半島や台湾では「国語」を強制し，満州国，中国大陸，タイ国などでは「日本語」学習を奨励した。当時，朝鮮半島と台湾は植民地化され，日本国内とされていたから「国語」の呼称を使い，満州などの地域は日本国内ではなかったから，「日本語」の呼称を使った。現在でも外国では日本語，国内

では国語，留学生相手なら日本語と使い分けているはずである。当然，英語に訳すなら「国語」も「日本語」も同じ Japanese である。

ところで，日本語学関係の雑誌は，商業誌も，専門誌もあり，言語学会の機関誌もある。しかし国語学については『国語学』しかない。訓点語学会は国語学的研究の中心になり得る学会であるが，訓点語を中心にする方針を変える様子がないので，「国語学会」がなくなると，典型的国語学者は所属する学会がなくなる。新名称になっても国語学的研究を排するのではないが，横書きにしたのは，漢文訓読文を含む論文は後ろに回すという意味でもある。国文学と綯い交ぜになった，典型的な国語学的研究を行っている者には，横書きの「日本語学」には帰属意識が持てなくなるのは已むを得ないだろう。

『国語学』を横書きにすることについて，私がちょうど編集委員に当たっていた時に，委員の意見聴取があったので，「これまでも縦書きを原則としつつ，横書き論文も掲載してきているのであるから，変更には意味がない」という意見を述べた（ついでながら横書きに伴って，巻号制にするという案にも賛成しなかった。通巻では年度が分からないという理由だったので，それなら 2000-1 という分け方の方がましであるという意見を述べた。巻号制に変わった現在でも，巻号制に変えた理由が分からない）。

大きな言語で，縦書きを維持しているのは，すでに日本語だけになっている。少数民族の言葉には縦書きが若干残っているが，中国語や朝鮮語も横書きが原則になり，韓国でも，最後まで縦書きを維持していたある雑誌も横書きになった。日本では，新聞・雑誌・国語教科書など，多くはまだ縦書きを維持している。国語国文の世界でも縦書きが原則である。縦書き文化からみれば，日本語は最後の砦となっているのである。本来，日本の文化や伝統を守ってゆくという意識があって良さそうな，日本語に関わる学会が，その縦書きの意味を全く振り返ることなく，横書きにしたことは，自国の文化に無頓着という日本人の性格の一つの表れではあるが，私は非常に残念に思っている。国語学会に対する愛着も，予想していた以上に，急速に萎んでいった。

しかし，横書きになってしまった以上，名称は変えざるを得ない。というより，横書きがすでに名称の変更を前提にしていたはずなのである。縦書きは国語学的研究を主とする，横書きは日本語学的研究を主とするとの意思表示である。あえて横書きに変えたのである。名称もその意志どおりに変えるべきである。学会名や機関誌の改名などは，横書きへの変更と比べると，心理的な，小さな問題である。早く改名して，この奇妙な横書きの『国語学』を無くしてしまう方がよい。変えられた名称を見てから，言語学会の日本語研究と棲み分けのできる学会誌になるのか，その一部門になってしまうのか，また，私のような国語学者でも帰属意識をもてるかどうか，考えてみたい。

もし，名称を変えないのなら，縦書きに戻すべきである。

——京都大学教授——

(2001 年 10 月 1 日　受理)